

# 特別展・展示実績と今後の課題について

塩満正哉

## 一 はじめに

国立公文書館の展示会は、当館の独立行政法人化以来様々な改革が行われた結果、二〇日間に及ぶ春・秋の年二回の特別展、並びに、夏の特別企画や常設展を実施する体制となった。現在、展示会は、利用者が公文書等になじむ主要な手段となっているほか、平成一八年秋に実施した「明治宰相列伝」について、平成一九年度からインターネット上でのデジタル展示が実施されており、歴史公文書利用の重要な手段の一つとなっている。さらに、特別展の実施に際しては、有識者から構成されるアドバイザー会議の実施によるご指導や、展示テーマに則し、当館の所蔵資料の紹介を中心とするが、関係機関の協力を仰ぎ、デジタル面等の展示を充実させるなど、来場者によりわかりやすい展示を志向している。

本稿では、私が平成一六年秋の特別展「鉄道」、平成一七年秋の「国勢を計る」、平成一八年秋の「明治宰相列伝」の企画に携わった経験を踏まえ、特に展示会実施の際やそれにいたるプロセス等において抱いた感想等や今後の当館の展示企画などの課題について、担当者として率直に述べてまいりたい。

具体的には、個人的感想を交えながら、三年間の特別展について、展示会ごとに、その概要、展示のプロセス並びに入場者の評価という観点から分析し、最後に全体の総括と今後の方向性について私見を述べることにする。

## 二 平成一六年一〇月「鉄道展」の実施

### (一) 展示予告の実施

夏展は、「いざ旅へ！」の企画で、平成一六年七月二〇日～九月一七日まで実施した。東京から伊豆・箱根方面への宿泊旅行を想定し、出展資料を選定。明治・大正・昭和初期にかけて、遠距離の旅の手段は鉄道であり、鉄道関係の資料を多く出展した。このため、夏の企画展とのタイアップと秋の予告をかねて、交通博物館等から借用したパネル写真等を当館常設展の続きに別のコーナーを設けて展示した。しかし、その効果は結果として分からず、この試みは、「国勢を計る」及び「明治宰相列伝」では行わなかった。

### (二) 鉄道展の実施

同年一〇月、当館所蔵の鉄道公文書を中心に、写真や鉄道模型などのモノ資料を用いて、国立公文書館展示会史上初の「鉄道」をテーマにした展示会を実施した。この年の三月、九州新幹線が開業したほか、同じく一〇月には、東海道新幹線が開業して四〇周年を迎えた。こうしたメモリアルな年だったのである。

会期中台風などもあり、余り天候に恵まれなかったが、鉄道マニアを中心に一六日間で五、五三七名の来館客を集めた。来場者は、地下鉄のポス

ターなどを見て来た、あるいは鉄道マニアが多かったという。また、一月九日、原武史先生（明治学院大学教授、「大正天皇」「鉄道ひとつばなし」などの著書がある。）には、「鉄道と日本人」というタイトルで、一月九日、講演いただいた。台風二二号が接近し、心配が絶えなかったが、講演会実施時は、幸いにして暴風雨のピークではなく、支障なく終了し、ほつとした。当日、悪天候にもかかわらず、一二人という入場者を集め、当館四階の会議室が埋まったのは驚きだった。また、一月一日（鉄道記念の日）は平日にもかかわらず、夜間開館も含め、多くの来場者があった。

ちなみに、一月一日（旧暦の九月二日）は、明治五年、日本初の鉄道開業式が挙行された日でもあり、明治天皇、西郷参議など政府高官が新橋・横浜間を往復し、両ステーションで式典が行われている。当時の鉄道路線は、新橋・横浜間、京都・神戸間や品川・前橋間など公文録、公文附属の図（重要文化財）にもあるが、土地買収の影響があったといわれている。開業の新橋・横浜間の一部路線は、海中に土手を築いて、その上にレールを敷いて走行した。この様子は、多くの錦絵にも描かれている。東京都心には長らく、路線を引くことはできず、上野駅（明治一八年開業）・新橋駅間の交通は馬車鉄道だった。

特別展「明治宰相列伝」にも登場する伊藤、大隈も明治三年に日本政府が、初めて発行した外債をロンドン市場で引き受けてもらうなど鉄道開業に向けての資金調達に尽力した。なお、彼らは、この功により、特別な賞与を与えられており、初期の明治政府の実力者となり、ライバルともなった。鉄道事業は日本の近代化の礎だったのである。

公文附属の図は、品川・前橋間や手宮・幌延間（北海道炭鉱鉄道・官鉄）を出展したが、布製に細かく図が書かれていたのは印象的だった。新橋・

横浜間とあわせ、いずれも主要駅ごとにキャプションを作成し、わかりやすい展示に努めたつもりである。なお、機関車模型を動かすことも考えたが、模型を動かすことに金がかかるし、保守点検、安全運行のため、技術者をつけなければならぬ。コストのかかるこの方法は難しく、実施しなかった。

このほか、公文書以外では、東武博物館から模型を借り受け、平台部分の各コーナーの最後に展示したり、壁面には東武博物館の他、交通博物館、国立近代美術館、横浜開港資料館、（株）阪急電鉄所蔵の写真を借入れ、パネル化して展示し、ビジュアル性を持たせた。

交通博物館には、解説や音声ガイドなどのチェックや公文書以外の鉄道に関するレファレンスへの協力などいろいろ協力をお願いした。ちなみに、交通博物館は、平成一八年三月に閉館、さいたま市へ移転し、鉄道博物館に新たに衣替えすることとなり（平成一九年一〇月オープン）、このため、貸し出し可能なものが限定され、写真のみの借用だったが、開業当初の一号機関車、北海道開拓使の弁慶号、夢の超特急として知られ、満州を走った「あじあ号」、更に開業当時のひかり号など多彩に富んでいた。今後、鉄道博物館が整備されても、当館とは距離が離れているため、本展示会のように足繁く通うのは難しいものの、オープン後、当館とホームページのリンクを行い、当館ホームページで公文書の所在状況を記載しているところであり、今後関係強化が望まれる。

東武博物館とは模型と写真の借り受けを行った。模型は、当館の展示ケースに入るくらいのサイズを考慮し、三点を選定した。東武鉄道開業当時の蒸気機関車（明治三七年七月、埼玉県越谷駅付近の写真に登場）、旧特急車両（昭和三五年から平成三年まで運行）、特急スーパーシアである。展示に際しては、については、当時の写真、については、当館所蔵の

車両の新造許可申請書、 については、 絵図（パンフレット）などをあわせて展示した。各コーナーの最後にこれらの展示ケースを置いた。公文書の展示をよりわかりやすく認識できると思う。

ちなみに、東武鉄道は、明治三二年八月、久喜・北千住間（四〇・一キロ）が開業した。東武鉄道によると、業平橋本社にあった開業当初の資料は、残念ながら空襲で焼けてしまったとのことだ。当館にある資料の重みを改めて感じた。

（二） 壁面展示から思うことと時刻表と路線図の展示

急行のぞみ（釜山→奉天）、急行ひかり（釜山→新京）が走っていたこと、即ち現在の新幹線のネーミングは初代ではないのもおもしろい発見だった。過去の時刻表のパネル（JTB発行の復刻版から出展）を作成し、壁面に掲載した。戦前、大陸に夢をかけた関係者が戦後の日本に再生させたという物語だ。

また、鉄道寮、鉄道局（工部省、内閣）時代の明治三三年までの時刻表は、官鉄、日本鉄道などの民鉄を含め、各線ごとに公文録、太政類典に掲載されているため、その部分をパネル化して作成、一〇〇年以上前の時刻表を再現した。なお、昭和初期になると、冊子形式の時刻表が誕生、その表紙と裏表紙には当時の世相が分かる絵図などが記載された。

開業当初、どの鉄道路線も一日数本から一〇本の列車の往復にすぎず、のんびりとした時代の様子がわかった。開業当時の新橋・横浜間は五三分、当時としては、この区間を日帰り往復できることはかなりの驚きだろう。明治三二年には、新橋・神戸間（官鉄、東海道本線）が開通し、一日一本直通列車（所要約二〇時間）が走ることとなった。さらに、昭和九年から運転が開始された「あじあ号」（大連→新京）は時速一二〇キロで、満州

の平原を駆け抜けたというから、技術の進歩には驚くべきものがある。「あじあ」号が基となった新幹線も大きく姿を変えている。開業当初の〇系の写真を展示したが、当時は、時速二一〇キロ、東京・新大阪間を約四時間で走ったが、現在は東京・博多間を最短四時間五〇分で走る七〇〇系の新幹線が走っている。三〇〇キロと世界で最も早い新幹線、フランスのTGV、ユーロスターなどと肩を並べている。車両の先頭はジェット戦闘機のような。スピードのほか、快適性からも開発が推進され、進化が続いている。

他館の鉄道展などでよくおこなわれているが、鉄道路線図については、当時の公文録、太政類典には掲載されているものを大型パネル化し、壁面に展示した。しかしながら、展示パネルと采館者の距離が離れていたため、字が見づらいとの声も一部の来場者からあった。展示の見やすさは常々考えなければならぬ課題だと思う。

（四） 人気の鉄道公文書

鉄道展の実施以来、鉄道公文書の利用が増えている。当館には、二〇〇〇冊を超える鉄道公文書があり、全て、公開されている。このため、公開審査の遡上にはあがつてはこないのだが、紫色の装填なので、まばゆく、閲覧などの出納の際、目立つ存在である。当館以外に鉄道博物館にも三〇〇〇冊あまり存在し、そのうち、九三冊が平成一五年度重要文化財に指定されている。また、大正三年アムステルダム駅を参考に建てられた東京駅丸の内側の駅舎や明治一〇年当時の御料車も同じく重要文化財に指定された。今後、丸の内側の駅舎は、創建当初の姿に復元されるという。

閲覧利用の多くは、いわゆるマニアが紙目録を見て、閲覧するのが一般的と聞いた。交通博物館当時の鉄道公文書を含む文献資料の利用状況は、

平均すると、おおむね二日に一件、閲覧資料四点（原資料一点、マイクロフィルム三リール）程度だそうである。

(五) 今後も大切な展示素材

鉄道に関する展示会は、鉄道専門の博物館だけではなく、各地の博物館・公文書館などでも時折行われている。平成一六年、群馬県立歴史博物館で、「ぐんまの鉄道」というテーマの展示会があり、図録を取り寄せ、当館の展示の参考としたほか、同年、当館の展示会後、葛飾区郷土と天文の博物館で「人車鉄道」の展示会があった。

人車鉄道は、人の力で車両（旅客、貨物用）を押す鉄道で、明治二九年に小田原・熱海間で開業した豆相人車鉄道が最初とされる。（駅の跡地に表示板が設置されている。）主に、関東、東北地方に広まり、大正時代がその全盛期だった。自動車などモーターゼーションの進展に伴い、昭和初期にはほとんどの人車鉄道が廃止された。

私もあまりよく知らなかった分野で感心したが、当館の特別展を見た人が来場客の中で多かったことを聞いた。

また、つくば分館においては、平成一七年八月のつくばエクスプレスの開業にあわせて、展示を行った。本館の展示を参考にしながら、つくばの地域性を持たせた展示で、六〇〇名あまりの来場者を集めた。

今後も、「鉄道」は大切な展示素材として、活用されることになると思う。

三 平成一七年一〇月「国勢を計る」展の実施

(一) 展示会の概要

平成一七年一〇月一日（土）から二〇日（日）、当館所蔵の統計関係公文書を中心に、各種統計グラフや統計資料館所蔵の国勢調査などのポスター、関係グッズなどのモノ資料を用いて、「国勢を計る。公文書に見る統計の歩み」を実施した。

統計は、人口や経済力の測定等統治の基盤として不可欠であるのみならず、国民の日常生活に広く、深く浸透している。また、直接的にしろ、間接的にしろ、また、意識するしなやかかわらず、国民は、統計調査の対象になるとともに、統計調査結果を利用して、その恩恵を受けている。

平成一七年は、一〇月一日現在で国勢調査が実施された。国勢調査は、五年に一度、日本国内の総ての人間と総ての世帯を対象として実施される、最も基本的かつ大規模な調査である。そこで、この国勢調査を契機として統計への国民の関心が高まるこの時期に、本展示会を開催し、日本の近代からの歩みを顧みるとともに、統計の果たす役割を明らかにすることとした。

近代センサスは、特定の個々のものをコントロールするものではないこと、調査対象の全てを数え上げること、特定の時点における調べであること、を備えていることにある。アメリカでは、一七九〇年に、これらの要件を備えた全国的な人口センサスを実施した。日本では、その実施の検討が始まったのは明治に入ってから、さらに第一回国勢調査は、アメリカから遅れること一三〇年である。

明治四年、現在の総務省統計局の原点たる太政官正院政表課の発足以降、明治、大正、昭和の戦前・戦後を中心に統計調査に関する重要な軌跡をた

どるとともに、戦後社会の発展とそれを裏付ける統計結果を当館の所蔵資料並びに総務省統計局所蔵資料等で紹介した。

「ひとたびこの調査を行うときは、全国的情勢、これを掌上にみるをうべし」（衆議院「国勢調査執行建議」（明治十九年）、明治三五年の「国勢調査二関スル法律」制定、大正九年に実施された第一回国勢調査、昭和二〇年の「幻の国勢調査」など、国勢調査に関連する貴重な公文書を中心に、明治以降の統計の歩みを振り返った。

また、「統計院設置ノ件」（明治十四年）、「国勢調査二関スル法律」（明治三五年）、「国勢調査施行令」（大正七年）、「統計法」（昭和二年）、「統計報告調整法」（昭和二十七年）などの公文書や「日本人の人口の推移と出生率の推移」、「日本の都市化率と第一次〜第三次産業構造」などの統計グラフ、第一回国勢調査が実施された大正九年の国勢調査の際、作成されたポスター、絵葉書、徽章、記念章などの資料を展示した。

期間中（二〇日間）、一八六五人の来館客を集めた。また、一〇月八日には、当館高山正也理事による「幻の国勢調査」というタイトルで、当館に於いて講演会を開催した。一三〇名の入場者を集め、盛況だった。

## （二）知識の習得

展示会開催にあたって、国勢調査の歴史に関する知識の習得に努めた。国勢調査の歴史は、日本の歩みを投影していると思った。主なものを三つ挙げたい。

第一回国勢調査の原型として、「甲斐国現在人別帳」の調査があった。この調査が今の山梨県を対象として、明治一五年に全数調査で実施された。当時の調査事項は、住家、（土地、家屋の所有関係）、姓名、族籍（華族、士族、平民の別）、世帯における地位、性別、配偶関係、年齢、

生国、宗旨、職業、身体障害の一一項目、一方、第一回国勢調査の調査事項は、氏名、世帯における地位、男女の別、出生の年月日、配偶の關係、職業及び職業上の地位、出生地、戸籍または国籍の八項目であり、ほぼ同じとまでは言い難いが、「甲斐国現在人別帳」の調査項目を基本に、時代の変遷等も考慮して、第一回国勢調査の調査項目が決定されたと考える。しかし、日本の国勢調査の実施は、日露戦争などにより遅れ、第一回が試験調査から約四〇年経過した大正九年であり、清国（明治四四年実施）、アルゼンチンよりも遅れたという。

第一回国勢調査は、計画から実施まで実に長い年月が費やされ、国勢調査法制定から数えても一八年を要したものの、国は「文明国の仲間入り」を合言葉に大変な意気込みでこの調査に臨んだ。名士による講演会、新聞の華々しい報道、旗行列、花電車、チンドン屋までが広報に活躍。調査の行われた一〇月一日午前零時の前後には、各地でサイレン、鐘、太鼓が響き、文字通り国を挙げての一大行事になった。第一回国勢調査は、「日本最初の全国的事業であり、その業績は素晴らしい」として、これを長く表彰記念するため、調査実施翌年の大正一〇年、国勢調査記念章が制定された。記念章は青銅製で、表面の図柄は、戸籍の巻物を持った大化年間の国司の立像を模したものである。以後の調査において、記念章は出ていない。展示会では、これに関する公文書及び実物を展示した。なお、結果の速報（世帯及び人口）は、調査年の二月に出したが、「道府県郡島嶼市区町村別人口」は、翌年の八月に出されている。

戦前は五回にわたり、国勢調査が行われ、本格調査が行われた昭和五年（二二項目）と昭和十五年（一一項目）、それ以外の氏名、男女の別、出生年月、配偶の關係などについてのみ調査した大正一四年（四項目）と昭和一〇年（五項目）に分かれるが、昭和五年には、失業と住居の室数

が盛り込まれ、昭和一五年は、それに代わり、指定技能と兵役の関係が調査事項となっており、時代を感じさせる。また、調査費は、大正九年は、五七九万円、大正一四年は二五万円、昭和五年は三五四万円、昭和一〇年は九一万円、昭和一〇年は、八五〇万円となっている。物価変動の影響はあるが、関東大震災の影響と昭和不況により、実施予算も変動している。また、実施地域は、当初から日本の実効支配地域で行われている。(大正九年の朝鮮の国勢調査は中止)

昭和二〇年の国勢調査は、戦局の悪化に伴い、中止された。戦中・戦後の人口調査は、資源調査法に基づき、実施されたが、内地のみ調査員調査により実施された。また、調査不能の地域もあり、戦前に行われた国勢調査と結果を単純に比較できない。昭和一九年、昭和二〇年、昭和二一年にわたり、戦中は戦闘要員の把握のため、終戦後はGHQによる政策の必要性から三年連続で実施された。しかし、正確さに欠けるとして、統計法に基づき、改めて昭和二二年に臨時の国勢調査を実施している。

### (三) 総務省統計局の協力

展示会の実施においては、総務省統計局の協力をいただいた。かなりのモノ資料を統計資料館から借り、展示に厚みを持たせた。また、専門家から以下の貴重なアドバイスをいただいた。これらのご意見を展示にあたり、最大限に生かした。

第一回国勢調査の実施に至る資料及び第一回調査票の展示が必要。機密資料だった戦争中の国勢調査資料の展示も興味深い。

話題性もあり、都道府県別人口の変遷など人口に関する資料も必要。データの見せ方の工夫、小中学生にもわかる展示の工夫を行う。

平成一七年国勢調査に関する紹介コーナーを別途設置する。

### (四) 新規移管資料の活用

平成一五年度、平成一六年度に併せて、一一〇冊程度移管された統計関係事務資料も展示に大いに役立った。ほんの一部だが、実際に展示されたほか、展示されなくとも、解説や音声ガイドの記載の背景資料として、あるいは、講演会の基礎資料として役に立った。昭和二〇年前後の資料は、傷みがひどく、読みこなすのに苦労したが、とくに戦争直後、モノ不足を訴える内容や一度使った紙を再度利用しているなど、供給が切迫した中で、統計を行っていたことがわかる。また、インフラが整わない中、洪水などの発生により、調査実施が不可能だった点などの記録も生々しい。

統計資料館からは、第一回からの国勢調査のポスターや各県別の調査結果報告書、各種記念品の借用のほか、平成一七年の国勢調査の実施プロセスを物語る資料の展示も行い、公文書だけではない、これまででない総合的な展示を行ったつもりであるが、他の展示会の場合、来場した鉄道や幕末・明治ファンの類が少ないためか、国勢調査の実施時期にもかかわらず、こちらの意図したとおりには入場者数があまり伸びなかったことは残念である。

統計史は、教科書にはあまり取り上げられておらず、残念だが新鮮な感じがした。いろいろと研究してみると、日本の歴史に翻弄されてきた統計の姿がわかる。今後も、時代の変化にとまない、制度も改革されていくことと思われる。これからの動きに注視したい。

総務省統計局とは、関係する公文書のほか、移管基準の改正に伴い、国勢調査に関する各種報告書も移管するよう交渉しており、一大資料群が誕生することを期待している。

#### 四 平成一八年一〇月開催「明治宰相列伝」展の実施

##### (一) 諸先生のアドバイス

展示資料は、明治期に在任した七人の総理（伊藤博文、黒田清隆、山県有朋、松方正義、大隈重信、桂太郎、西園寺公望）の残した業績のうち、これまでの展示会で登場していない文書を展示するよう心掛け、結果として、あまり一般に知られていないと考えられる歴史的事実を記したものが多く出た。彼らはもともと幕末の志士であり、海外に留学、旅行し、明治日本の改革者となり、ついに総理に就任し、中には元老として、大正、昭和の日本に影響を与えた人物もいた。伊藤、大隈の鉄道事業に対する貢献、また、松方の産業振興、金融制度の確立に対する尽力など、内閣総理大臣として、あるいは、政府の中堅として、近代化政策へ与えた影響を物語る文書を多く出した。

また、彼らの伝記などを讀むと、ドラマチックであり、その世界に引き込まれる。非常に奥の深い世界である。その面白さをどう一般来場者に伝えていくか、腐心した。

例えば、解説や音声ガイドの作成に当たっては、公文書の内容のほか、各人の伝記や各人の著書も参考にした、展示資料解説と言うよりは、資料の入口となる歴史背景の解説に重点を置く方針をとり、おもしろいエピソードも盛り込むよう努力したが、細かい事実内容のチェックも必要だった。

アドバイザー会議のメンバーである宮内庁の梶田先生や國學院の坂本先生には、お忙しいにもかかわらず、詳細にチェックしていただき感謝申し上げます。また、同じくアドバイザーのNHKの辻先生、東京大学の加藤先生には、忙しい合間を縫って、内覧会にもお越しいたご、また、励ましのお声をいただき誠にありがたかった。また、展示準備作業のプロセスで、

様々なご指摘、ご教示をいただき、枚挙に暇がないが、いくつかご紹介する。

アドバイザー会議において、三条首相の存在に関するご意見を受けた。確かに教科書、あるいは、内閣制度一〇〇年史等でまとめられている勘定では、三条実美は首相に就任しておらず、臨時首相という扱いであり、本展示会でもそれを踏襲したが、首相に就任し、わずか二カ月の在任期間に黒田内閣が手掛けた条約改正交渉の中止や内閣制度の基準を定めた内閣官制の制定などに貴重な役割を果たしたという。展示会では、参考資料として、「内閣官制」を展示、三条首相の官職及びサインを展示した。

山県、西園寺が大正や昭和期に、力をふるった「元老」は正式な機関ではなく、漸次立憲政体の詔により立法の諮問機関として、明治八年に設立され、明治二三年に明治憲法の施行に伴い廃止された元老院とも異なる。元老就任のいきさつは元勳優遇や大政をたすけよとの詔勅によりなるもの、また、西郷従道のように詔勅のないケースもある。西園寺は正二位勲一等公爵として、昭和六、九年事変行賞裁可書、昭和六年の若槻内閣や昭和七年犬養内閣の倒壊後の後継内閣の選定に貢献した。西園寺は、晩年、静岡県興津の坐漁荘にすみ、多くの政治家が、かれの別邸を訪ねてきたという。伊藤、山県、松方、西園寺の四名の葬儀は国葬として行われ、新聞などでは大きく扱われたが、西園寺の場合はラジオで放送された。

各総理大臣の任命裁可書を展示したため、その副書に関するレファレンスが多かった。内閣総理大臣の任命の副書は、明治四〇年に制定された公式令で、各国务大臣及び内大臣が行うこととされたが、それまでは、特にルールが決まっていなかったと考えられる。内閣のメンバーの中で、長

老とされる人物が行っていたと思われる。

国葬の決裁に記されていた山県を持つ数々の役職（死去時）に驚いたが、そのうちの二つで、比較的馴染みのないものが議定官（ぎていかん）である。これについてのレファレンスもあつた。議定官とは賞勲会議の構成員であり、賞勲会議規定により定められたもので（官報 明治二六年一〇月二一日参照）、勲章、勲位を授与に関し、特に功績の大きな人物について話し合う会議の構成員である。構成員として、賞勲局総裁、副総裁、議定官（一五人、勅任官かつ勲一等以上の資格を持つ。）となっている。

明治四二年に桂首相を訪ね、ともに陸軍大演習を視察した、のちに第一次世界大戦時に英国陸軍大臣となるキツチナー將軍（元帥）は歩兵でなく、工兵出身であつたため、スーダンの戦いの際、鉄道とナイル川を組み合わせて、戦闘を優位に進めたという。ロジスチックス（後方支援）が得意といわれていたという。のちに志願兵からなるキツチナー陸軍を編成、第一次世界大戦を戦い、戦死している。（將軍は乗船した巡洋艦が触雷し、艦と運命を共にした。）

## （二）来場者の感想など

明治は、日本の近代化が急速にすすんだ時代であり、憲法制定、条約改正、国会開設、日清戦争や日露戦争にかかわる有名な歴史的公文書も展示したが、総理になる以前の官僚や軍人の頃、例えば、知事や各省次官だったころの政府での活躍を顕す公文書や劇的な生涯を物語る公文書なども、展示し、一般来場客に関心をもってもらうべく工夫したつもりである。

展示会は、一階で行われたが、時々、様子をつかがい、来場者の動きをみると共に、会場で行われたアンケートや本展示に関するインターネット

におけるブログをチェックした。

「鉄道」のときと異なり、比較的天候に恵まれ、あらゆる層の方々が来場した。明治ファンは、必ずしも高齢者ばかりではない。黒田、松方の一族がお見えになり、壁面の個々の内閣総理大臣の写真入りの年表について写真を撮られていた。また、幕末ファンの方も来ていただいた。明治総理が、幕末の志士だったからだろう。スタートを明治初年にそろえたため、残念ながら、幕末の資料は展示していなかったが、まったく政治体制は異なると思うものの、江戸、明治の連続性を感じた。

御厨先生の講演も盛況で、なかなか質問がと切れず、打ち切るのに苦労した。明治の総理は、その強力なリーダーシップで、日本を牽引し、欧米の植民地化を防いだ。展示会の実施作業に当たり、私も彼らの伝記を呼んだが、強靱な精神力と体力に感心するとともに、かなりの個性派ぞろいと思った。

入り口では、ポスターの顔写真について、よく聞かれた。受付にパンフの顔写真に名前を加えたペーパーを置き、対処した。外のポスターと同じデザインの大きな段幕で記念写真を撮る人が多かった。アジア太平洋アライプス学教育国際会議（ICA/SAE）のメンバーに展示会を案内するとともに、大学の歴史授業にも活用された。また、企業による若手社員教育における歴史教育の場としても活用され、背広姿の若者ばかり三〇名ほどが集まっていた。

館内でのアンケート結果だけでなく、インターネットで展示会名をクリックすると、さまざまな意見が寄せられていることがわかる。特に「明治宰相列伝」で顕著だったが、ブログで展示会を紹介する人が多い。数多くの皆様からの感想が寄せられ、見るのが楽しかった。



## (三) テーマの選定に苦勞

展示会の企画にあたり、当初、明治全般の人物伝を取り上げることも考え、いろいろなカテゴリーを考えた。「鉄道」や「国勢を計る」のように、九州新幹線開業や国勢調査の実施などの記念となる事柄が特になかったからだ。そこで、調査を行い、さまざまな角度から企画を検討した。

明治に活躍した主要人物を職業別に分類し、当館の所蔵公文書の量と照らし合わせながら、どの分野から選定すべきか考えた。その結果、実業家（洪沢栄一、岩崎弥太郎等）や文学者（夏目漱石、森田太郎等）、科学者（北里柴三郎、野口英世等）などは、掲載公文書が少なく、やはり、政治家、官僚、軍人として活躍した人物に関する公文書が多かった。その点を踏まえ、さらに考察をすすめ、昨年在閣制度創設一二〇周年に当たることなどから、研究連絡会議の場でも議論し、テーマを決定した。

時間に追われる日々だったが、結果的に三年のうちで最も多くの来場者があった展示会だった。テーマについても 時宜にかなっているとして、アンケートでは好評だった。

## 五 展示会の開催を踏まえた今後の課題について

以上、平成一六年度から一八年度の展示会の開催実績について述べてきたが、今後の課題も出てきた。

課題としては、展示会の評価基準である入場者数の増加につながるテーマの選定、展示会の事前調査段階における詳細な資料調査の必要性が挙げられる。質の高い展示に向け、展示会の在り方に関する論議が今後とも必要となると思う。

## (一) 入場者数の増加策

テーマの選定で、入場者数が大きく変わることがわかった。テーマ選定にあたっては、話題性を重視すること、一般に親しみやすいものであることとともに、実際に実施してみて、仕事などで忙しい合間を縫いながら当館を訪問するファンの存在が大きいと思った。「国勢を計る」は、展示期間中に、国勢調査が行われるなど話題性があったのだが、ファン層が残念ながら大きいとはいえなかったようだ。三年間を通して考えると、ファンの存在を期待できるテーマの設定も一つの選択肢だと思った。

もっとも、時宜にかなった展示を行うのがやはり、第一だと思う。平成一九年五月に開催された特別展「再建日本の出発」で日本国憲法を取り上げた際には、憲法六〇周年を記念した展示だということ、また、国民投票法など憲法に関する話題が多かったことなどにより、マスコミなどでもかなり報道され、多くの来場者を集めた。連休中には一日、一〇〇〇人を超える入場者があり、入場に際し行列ができるほどであった。

しかしながら、展示会を行うには、当館の所蔵資料の紹介を行う必要から、その分野につき、十分な資料があることが必要条件である。特に時代別ではなく分野別で行う場合には欠くことができない。そのうえで、人気のある展示を考えていくべきだろう。

展示会の評価は、入場者数が主である。当館の平成一八年度業務実績に関する評価でも、展示会の項目で、「入場者数が着実にふえていることは評価できる。」とされたところであり、入場者数につながるテーマ選定は、重要な要素である。

「明治宰相列伝」でも、この検討に相当の時間とエネルギーを要した。既に、平成二〇年度の特別展のテーマは決まっており、当面心配はないが、これは、長期的観点から考えていくべきだろう。

(二) 詳細な資料調査の必要性

展示会の実施のため、所蔵資料の研究を行い、テーマの決定のほか、展示資料の選定、解説などの作成は、当館の調査研究業務の重要な事項とされており、毎年度の当館の業務計画に盛り込まれている。私も、三年間の経験を通じ、有識者によるアドバイザー会議の際だけでなく、逐次、アドバイザーをはじめとする有識者（全ての特別展）や総務省統計局（「国勢を計る」）、交通博物館（「鉄道」）などの関係機関に照会し、展示内容の質を高めるよう努力してきたつもりである。展示のためだけならば、それで満足だったのかもしれない。

しかしながら、展示会の実施のためだけでは、調査事項は限られており、十分な時間とエネルギーをかけ、所蔵資料の内容について、全体分析を図り、その結果を踏まえ、作業に取り掛かることは難しい。あらかじめ、資料群全体を分析しておけば、あとで、この資料を選定したほうがよかったかなという思いはせずにすむかもしれない。

詳細に所蔵資料を研究することが、結果的により質の高い公文書館の展示につながることを考えられ、歴史資料の専門家の協力を得て、資料を体系的に整備し、充実・蓄積を図ることが重要と考えられるからである。

展示会において、まず苦労するのが、テーマの選定とそれに伴う基礎調査である。

すなわち、詳細な研究を踏まえれば、調査結果（プロセスをふくむ。）を基に、十分な展示会準備が可能となる。展示会開催の一つの必要条件となる分野別の所蔵資料の状況が確認できるほか、調査のプロセスにおいて、有識者に積極的に関与していただくことにより、展示会の実施に必要な解説の作成、講演会の実施などの作業にも好影響を与えることが期待できる。展示会への期待が大きくなる現状を踏まえれば、質の高い展示に向けた、

作業が必要となろう。

展示会実施の方向性については、さまざまな意見があると思う。今後とも、議論を重ねるべき課題だと思つ。

（公文書専門官）